

# イギリス功利主義・原典コレクション

～ ベンサム、ミル父子の著作・書簡を中心に～



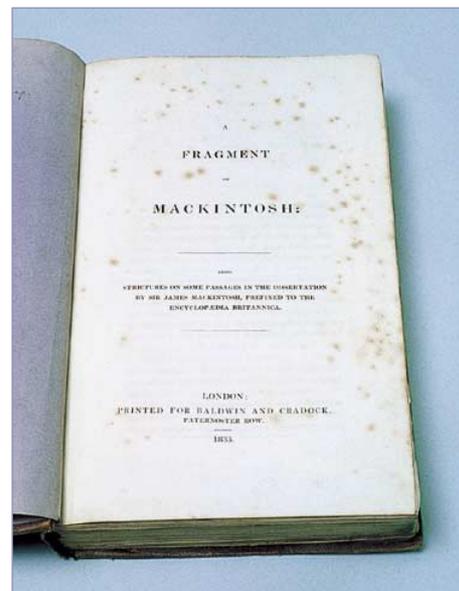
経済学部教授  
井上 琢智

大学では特別図書購入制度を設けている。これは学術的価値の特に高い図書を購入するための制度である。2000年度は原則的に原本であることや大学図書館の蔵書(コレクション)の価値を増幅させるような学術的、歴史的に貴重なものを選定し、「イギリス功利主義・原典コレクション」を購入した。ここにそのコレクションについて紹介する。

関西学院大学図書館は、これまでも「トマス・ホップズ著作文庫」「ジョン・ロック著作文庫」「アダム・スミス著作文庫」「ミル父子著作文庫」「柴田文庫(ロバート・オウエン、ウィリアム・モリス等)」「スコットランド啓蒙思想コレクション」「イギリス社会科学古典資料コレクション」「イギリス社会政策コレクション」など優れたコレクションを所蔵し、国内外の研究者への公開を通じて、研究・教育の促進に貢献してきました。

今回購入されたイギリス功利主義・原典コレクションは、ジェレミー・ベンサム、ジェームズ・ミル、ジョン・スチュアート・ミル父子の著作12点、書簡7通、日記草稿1点からなるコレクションで、上記の各コレクション、とりわけ「ミル父子著作文庫」へ組入れられることによって、本学図書館のイギリス功利主義関連文献が一層充実することは間違いありません。以下で、今回購入された主な原典の概略を紹介します。

ジェレミー・ベンサム(1748-1832)の著作については、これまで本図書館は彼の *Draught of a code for the organization of the judicial establishment* (1790?), *Defence of usury* (1790, 1796), *Plan of parliamentary reform* (1817), *A table of the springs of action* (1817), *Defence of economy against the Right Hon. George Rose* (1817), *Church-of-Englandism and its Catechism examined* (1818), *Observations on the restrictive and prohibitory commercial system* (1821), *An introduction to the principles of morals and legislation* (1823), *The book of fallacies* (1824) 甥のジョージ・ベンサムに出版の年の4月28日に謹呈した *Constitutional code* (1830)<sup>(1)</sup>, *State of [ ]*, *its constitutional code* (1830?), *Observations on the bankruptcy Court Bill* (1831) を所蔵していましたが、今回新たに *Papers relative to codification and Public Instruction* (1817), *The King against Sir*



『マッキントッシュ断片』初版、1835

ミル最後の著作でマッキントッシュの *Dissertation on the progress of ethical philosophy* (1830) への批判書であると同時に功利主義倫理学の基礎を論じたもの。購入本は、この息子ミルの没後、彼の没地アヴィニオンで競売に付されたもので、彼の蔵書であることを示すラベルが貼付されている。

*Chales Wolseley, Baronet, and Joseph Harrison, School-master* (1820), *Truth versus Ashhurst* (1823), *Indications respecting Lord Eldon* (1825)、それに雑誌の抜刷出版物である *On Mr. Humphrey's Observations on the English Law of Real Property* (1827) が加えられました。と同時に、彼のフランスへの影響を示すフランス語訳 *Letters a Lord Peham* (1804), *Defense de l'useure* (1828), *Sophismes Parlementaires* (1840) も加えられました。

父ミル(1773-1836)の著作については、これまで本館所

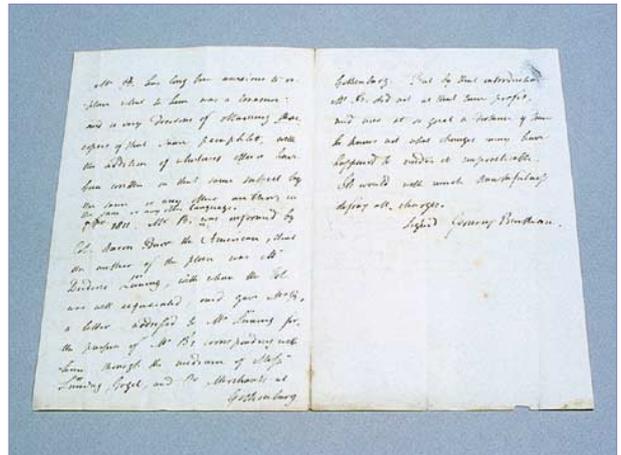
蔵の *Elements of political economy* (1st ed., 1821, 2nd ed., 1824), 同フランス語訳 *Elemens d'economie politique* (1823), *The history of British India* (2nd ed., 1848), *Analysis of the phenomena of the human mind* (1st ed., 1829), に加えて、*The History of British India* の初版 (1817) と息子ミル所蔵本であった *A Fragment on Mackintosh* (1st ed., 1835) が加えられました。

次に、自筆書簡については、ベンサム の J. Colquhoun 宛書簡 (5 March, 1816) の手元控え、さらに、S. Romilly (27 Aug., 1817), H. Brougham (8 Aug., 1818), C. Butler (30 Nov., 1819) のベンサム宛書簡があり、いずれも *The correspondence of Jeremy Bentham* (1968-) にも未収録のものです。また、父ミルのベンサム宛書簡 (3 Dec., 1813), S. Austin 宛書簡 (1827?), W. Molesworth 宛 (12 June, 1832?) 書簡についても未刊であり、父ミルの書簡集の編集が行われる際には貴重なものとして収録されるでしょう<sup>(2)</sup>。

これらの原典に加えて、今回のコレクションの価値をもっとも高めるものは、息子ミルの1820年7月20日から9月15日までのフランス滞在日記です。父ミルから驚くほどの早期教育を受けた息子「ミルの少年時代の最も重要な記録は、彼が15歳の時のフランス旅行の一部の間の日記である」<sup>(3)</sup>。というのはこの日記は「彼の知識の真の特徴とその年頃の彼の知的能力をある程度実証」できるからです。

この早期教育の仕上げとなったフランス留学は、私的にも親しい交友関係にあった功利主義者ジェレミー・ベンサム - この功利主義の普及に努めたのがミル父子 - の弟で工学上の発明の才能豊かなポーツマスの海軍工廠長官であったサムエル将軍の招待によるものでした。彼は退職を機に南フランスに移住していたからです。1819年7月30日、13歳になったばかりの息子ミルは、このサムエルに自分の学習状況を示す長文の書簡を送りました。「あなたにお会いしたのは... 1814年、私たち一家がフォード僧院に滞在した最初の年だったと思います。私の勉学の進歩についてお尋ね下さって誠に有難く思います」という書き出しから始まるこの書簡で、息子ミルは、ギリシャ語、ラテン語の勉強から始まり、ユークリッド、ニュートンで幾何、代数を学び、13歳でプラトンの『国家』を読み、アリストテレス、ホップズらで論理学を学び、オランダ史、ローマ政治史を書いたと報告し、最後で「フランス語の勉強を始めましょう」と書きました。息子ミルにとってこの留学はフランス語の勉強を含む一種のグランド・ツアーでした。

1820年5月15日ロンドンを出発し、18日にパリに到着。父ミルの紹介状を携え「セー法則」で有名なJ.B.セーを訪問・滞在。27日にパリを立ち、6月2日午前2時にサムエル一家の住む南仏トゥルーズ近郊のポンピニヤン城に到着。近辺を観光した後の6日からミルは勉強を始めました。ミルは図書室へしばしば通うなどしてボルテールなどの



「ジェームズ・カフェーン宛のジェレミー・ベンサム自筆書簡草稿」(1816年3月5日)

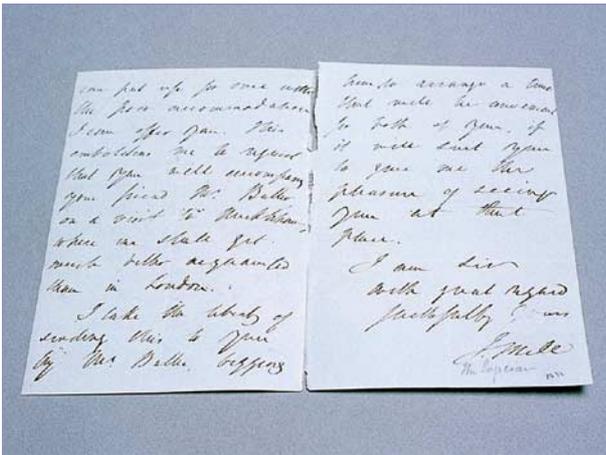
デンマークの調停裁判所に関する文献の調査をカフェーンに依頼する書簡で、ベンサムの手元控えである。

フランス文学を読み、またフランス語で文章を書く練習をしました。さらに微分など数学の勉強やサムエルの息子で著名な植物学者・論理学者となったジョージからは植物学を学びました。留学中、6歳年下のミルは兄のような彼から世話を受けたのです。

8月の初めに一応の勉強が終わり、サムエル一家とミルは8月10日から9月30日までピレネー地方を旅行し、10月になってモンペリエに定住しました。サムエルはこの土地の開拓に熱心に取り組んでいきました。11月になるとミルはモンペリエ大学の公開講座に出席し、論理学、動物学などを学び、数学、フランス語、フェンシングの個人教授を受け、翌年4月中旬までこの地で過ごしました。帰国に際し、パリのセー宅に再び立ち寄り、7月に帰国したのでした。

父ミルは、経済学者デビッド・リカード宛の手紙 (1821年8月23日) で次のように書きました。「ジョンはすっかり成長して、ほとんど大人のように見えますが、他の点では出発の時とそう変わっていません。彼はフランス語がうまくなりましたが、自国語をほとんど忘れてしまい、以前と同じように内気で臆病なように見えます。しかし、彼の向学心は以前と変わらず、従順さと良識を示しています。彼がフランス人の言う愛想の良い人間にはならなくとも、イギリス人の言う温厚で有用な人間になることを疑いません」と。

息子ミルは、このようなフランス留学の状況を日記に書き留めました。それだけでなく、息子ミルは清書した日記を6月2日から11月21日までの間に12回に分けて父ミルへ送りました。これが息子ミルの妹クララによって大英図書館へ寄贈されたのです。その記述期間は、5月15日から8月2日(英語)、8月26日から10月13日(フランス語)です。この清書版のもとになった日記の原本はどこにあるのでしょうか。



「ウィリアム・モウルズワース宛父ミル自筆書簡」(5月12日)

功利主義の機関誌 *Westminster Review*(1824-36)の発刊に際して指導的役割を果たすことになるモウルズワースを最初に父ミルに紹介したのがサラ・オースティン(法学者ジェームズ・オースティンの妻)であったことを示す書簡。

その一冊が、1956年アンナ・ジーン・ミルが購入し、スコットランドのセント・アンドリュース大学図書館に寄贈されたもので(51葉で、その内27葉が日記)、その記述期間は、5月15日から6月2日(英語)、8月10日から翌年2月6日(フランス語)です。

アンナ・ジーン・ミルはこれら二つの資料を用いて *John Mill's Beyond Visit to France, being a journal and notebook written by John Stuart Mill in France, 1820-21*(1960)を編集・出版しました。しかし、当然のことながら8月3日から9日までの記述は空白のままでした(これは、モンペリエ大学でのジュルゴンヌによる論理学講義ノート(フランス語)とともに、『J.S.ミル著作集』第26巻に再録されています)。

今回本館が購入した日記は、全部で42葉あり、第2葉表から第12葉裏までに7月20日から8月21日までの日記が書かれ、そこに既存の二種類の日記に欠けていた8月3日から9日までの記述が見られます。また、セント・アンドリュース版では8月10日および11日の最初はともにフランス語で書かれていますが、この日記の10日と11日の最初は英語で書かれています。また、第14葉表から第15葉裏までに8月22日から26日までが、第18葉表から28葉裏までに8月27日から9月15日までがフランス語で書かれています。

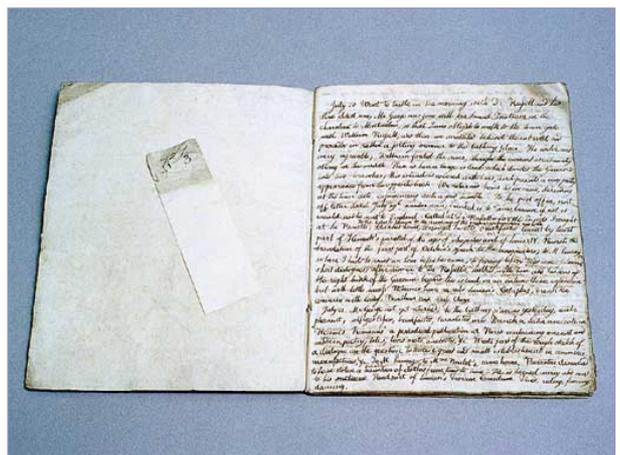
このフランス語で書き始められた最初の5日分については、ジョージ・ベンサムと思われる人物による添削がなされていますが、8月16日以降はミル自身による訂正が多く施されています。その他、旅行先の地誌・地理のメモ、金銭出納表のメモが数葉、またジョージから学びナチュラルリストとなったミルの植物学の学習メモが数葉、さらにセー宛書簡の下書きがあります。このセー宛書簡の下書きは、現在公刊されている書簡集の初出が1830年3月2

日であることを考えるとき、その価値はきわめて高いといえます。

ところで、このフランス滞在日記は、1922年3月29日、ロンドンのザザビーで競売に付されたメアリー・テラー(息子ミルの養女ヘレン・テラーの姪)の遺品21点の一つです。この競売番号727の資料は三冊からなり、その第一冊目がジュルゴンヌによる講義ノートで、現在はアメリカのピアポイント・モーガン図書館が所蔵、その第二冊目・三冊目がフランス滞在日記で、その第二冊目がセント・アンドリュース大学図書館所蔵本、第三冊目(第三冊目を示す紙片が添付されています)が関西学院大学図書館蔵となった日記なのです。

息子ミルのこのフランス滞在日記を含めて今回購入されたイギリス功利主義・原典コレクションはきわめて学術的価値が高く、国内外の研究者・学生の利用に供されることで、関西学院大学および図書館の名は高められるでしょう。

(1)なお、今回購入した原典の中にも *Constitutional Code* (1st ed., 1830)が含まれている。すでに本館が所蔵している版との相違については、本館所蔵本が綴への献本である他に、表表紙の前に「CONSTITUTIONAL CODE VOL. I」、その裏に「London / PRINTED BY O. AND W. REYNELL BROAD STREET GOLDEN SQUAR」と印刷されている1頁が製本され、それと同時に、「CONSTITUTIONAL CODE TABLE OF CONTENT AS SHEWN BY TITLES OF CHAPTERS AND SECTIONS」とタイトルされた1葉が折り畳みで製本されている。この表では全3巻までの章節が印刷されている。しかし新規購入分には、これら2点の特徴は見られない。



「息子ミルのフランス旅行日記」(1820年7月20日~9月15日)

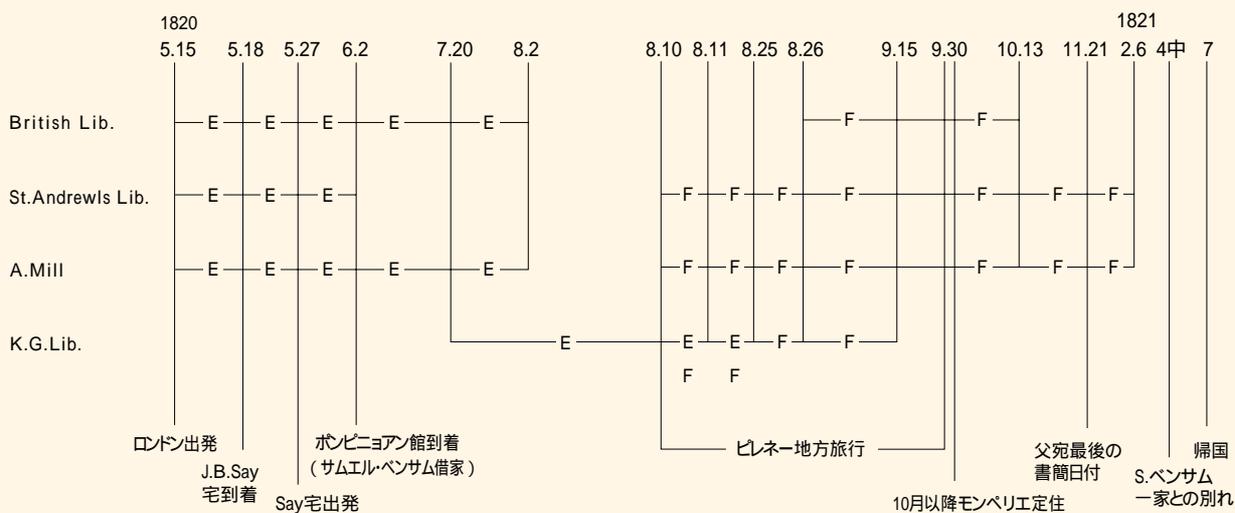
日記の左頁に置かれている紙片がザザビーで競売に付された際に付けられた競売番号「727の3」を示す紙片。

(2)本館が所蔵する息子ミルの6通の書簡は、*Additional Letters(The Collected Works of John Stuart Mill, vol.32,pp.172,184,193,194,210,226)*に収録され、国内外の研究者に利用されている。

(3)*Bain, A., John Stuart Mill:A criticism with personal recollections*(山下重一・矢島杜夫訳『J.S.ミル評伝』御茶の水書房、1993、8頁)。

本解説を書くに際して、紀伊国屋書店の佐藤図氏のお世話になった。記して感謝いたします。

### J.S.ミル・フランス滞在日記自筆草稿対照表



注) 表中のEは英語、Fはフランス語で、8月11日の下にFとあるのは、この日の記述の最初が英語で以降フランス語となったことを示している。

**井上 琢智** (いのうえ たくとし)  
経済学部教授

専攻は近代経済思想史

19世紀後半に生まれた近代経済学の創始者のW.S.ジェヴォンズやA.マーシャルの経済学と思想とその日本と日本への影響を軸に日英の交流史に関心をもっている。

『W.S.ジェヴォンズの思想と経済学 - 科学者から思想家へ - 』(1987)、『馬場辰猪全集』第4巻(編著:1988)、『マーシャルと同時代の経済学』(編著:1993)など。